様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８１１３９

研究課題名（和文）地域活性化に果たす高校教育の役割の研究－地域人材育成の教育社会学

研究課題名（英文）Sociology of Regional Human Resources Development: Role of High Schools in Underpopulated Areas

研究代表者
樋田　大二郎（HIDA, Daijiro）

青山学院大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：８０１８１０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　生徒の地域内のネットワークは向上の余地が多い。高校が生徒と町民の交流の場を作るなどのネットワーク形成促進を行う意義は大きい。また、生徒の結束型のソーシャル・キャピタルは豊かだが橋渡し型のソーシャル・キャピタルは豊ではなかった。“地域内よそ者”の育成という観点から、生徒に町外の知恵や技術、視点の学習機会を構築していることは重要である。なお、3要素間の相関が低いので、個々の要素への働きかけを意識しておくことが求められる。最後に当事者性（期待や可能性の認識、貢献意欲や誇りの喚起）とソーシャル・キャピタルには高い相関があった。ソーシャル・キャピタルの育成には生徒の当事者性を高める効果が期待できる。

研究成果の概要（英文）：Local network of high school students has still room for improvement. High school efforts to promote students’ network is important both for students’ career formation and local revitalization. We carried out the questionnaire survey to 395 students in high schools located in five mountainous areas and two isolated islands in Shimane prefecture Japan. It was carried out on November & December in 2014. We also visited Shimane prefecture over 20 times to interview with stuffs of high schools and local government employees in charge. In this study, we analyzed social capital which Robert Putnam thought was the core element of citizenship. We examined the state and problems of social capital, and also elucidated the effect of high school’s education to them. Our 3 main findings are as follows. Social capital of bonding type is rich. However, Bridging type is not rich. Sense of the party hereto with local community has a high correlation with social capital.

研究分野：教育社会学

キーワード：高校　地域活性化　人材育成　課題解決型学習　ソーシャル・キャピタル　当事者性　魅力化　地域内よそ者

１．研究開始当初の背景

教育社会学の高校研究では、これまで、トラッキングシステムやメリトクラシー規範、下位文化を分析概念として高校の進路分化機能、階層再生産機能、社会化機能（学力、職業技能、社会適応など）を分析し成果を上げてきた。これらのうち、進路文化機能の研究では、社会＝経済的要因やトラッキングなどの高校構造、各高校の指導の差異などを説明変数として、高校の進路分化を説明してきた。しかし「進路分化」では主として学歴到達度や進学先大学の偏差値など垂直序列的な分化が問題とされ、水平的、地理的な分化には十分な関心が寄せられなかった。

地方高校生の進路の地理的分布を見ると、進学の場合でも就職の場合でも大都市部が大きな割合を占めている。戦後一貫して「地元に大学がないから」「地元に企業がないから」という理由で地方の高校は生徒を大都会に送り出している。そして少子高齢化が進む今日ではますます「地元に○○がないから」の状況に拍車がかかっている。そのような中、産業の側面を見ると、工業地域への産業の集中から分散化（地方の自立）が進められようとしている。とりわけ近年は地方創生のスローガンのもとで地方の自立が大きな潮流となっている。しかし、高校研究はこうした状況を積極的に問うに至っていない。

２．研究の目的

本研究は離島・中山間地域にある高校の地域課題解決型学習の取り組みに焦点を当て、社会関係資本、当事者性、地域内よそ者などの概念を用いて、取り組みが生徒の水平的分化および地域の活性化に与える効果を検討する。

本研究の目的は曖昧で多様である。本研究は地域活性化の取り組みの中に高校教育を位置づける研究であるが、初発的な段階にあるので多様な要請に目配りし、明確に１つの目的を設定するというよりも萌芽的に多様な目的を内包する研究となった。①高校教育改革の視点からは新しい進路形成と進路指導を模索するものである。②地域活性化の視点からは地域の人材育成・人材集積の道筋を切り拓くものである。③教育社会学にとっては地域活性化を被説明変数とした高校教育研究のモデルをつくるものである。④教育政策研究にとっては実証的なデータに基づく地域振興のための教育政策の構築を研究するものである。

しかしながら、本研究がフィールドとする島根県の離島・中山間地域には、萌芽の段階よりも一歩先んじており、すでに「地元に○○がないから」論や産業の集中化を超えて生徒の地元就職と地元コミュニティへの参加を促進している地域や高校が存在する。そこでは、かなりの程度で若者の地元志向で自律分散的意識や実際の地元就職への道筋を切り拓くことに成功している。それらの“元気な地域”（いわゆる地域力が活性化されている地域）では、地域に根付いた新しい産業、新しいコミュニティ、新しい文化を創成する若者を輩出している。

本研究では成果をあげつつある地域課題解決型学習による地域人材育成の検討を縦軸の目的に設定し、この目的を達成するために必要な範囲において上述の①から④のような萌芽的な課題にも挑戦した。

３．研究の方法

地域活性化の取り組みを行っている地域と高校を対象として取り組みの背景・成り立ちやそこにおける高校の役割を検討した。こ

のことは一方で地域の取り組みが高校の人材育成に与える影響を検討し、他方でその反対の方向、高校の人材育成がそうした取り組みに与える影響を明らかにすることを意味する。

本研究の理論面では、産業の自律分散型化が高校教育に要請する機能を検討するために、結束型と橋渡し型のソーシャル・キャピタルの概念を高校研究に応用し、さらに生徒の「地域内よそ者」としての社会化および当事者性（「自分ごと」「自分たちごと」）の育成の概念を用いた。

表．本研究で用いた概念

高校生の社会関係資本 地域貢献や地域内起業を行う際には、地域内の諸資源を「あるもの探し」する過程と、探した資源を利活用する過程の 2 つの過程があり、また、多くの場合、契約よりも信頼と互酬性の上に成り立つビジネスであり、高校は信頼と互酬性のネットワークを構築する能力を育てることが求められる。
地域内よそ者 グローカルな働きやインターローカルな働きをして地域活性化に貢献する「よそ者」、 とりわけ地域内で育ちつつも「よそ者」の知識や視点を持つ者を「地域内よそ者」と呼ぶこととする。
当事者性 問題や問題の渦中にある人との心理的・物理的な関係の度合い。対象となる人・物事と同じ文脈にいること、同じ課題を持っていることを意識できること（自分ごと、自分たちごと。期待や可能性の認識、貢献意欲や誇りの喚起）。

研究の手順は、①先行研究の検討、②対象となる地域活性化の取り組みについての資料収集と聞き取り調査、③高校と地域の取り組みが高校生の社会化と進路形成に与える影響についての質問紙調査、とから構成された。これらを地域課題解決型学習に関連づけて行うことで高校教育の人材形成を多面的にとらえ直した。

②③では島根県の離島・中山間地域に所在する「魅力化・活性化事業」対象校である県立普通科高校 8 校とその地元の町役場、町民、および県教育委員会を対象として 2013 年 3 月～2015 年 11 月にかけておよそ 20 回の訪問聞き取り調査と研修会等への参加を行った。2014 年 11 月～2015 年 1 月にかけて上述 8 校のうち 7 校に対して 2 年生対象の集団自記式質問紙調査を実施した。

４．研究成果

地域活性化に果たす高校の効果には３つの側面があることが分かった。1 つは地域人材育成の即時的効果である。２つめは高校の人材育成の中期的効果である。３つめは地域人材育成の長期的効果である。

表．高校が地域活性化に果たす３つの効果

即時的効果 高校生が授業内外で地域に出て地域の活性化を学ぶことがきっかけとなり、地域内の資源の再発見や利活用が始まったり、学習への支援という町民の能動的な動きがきっかけとなって地域コミュニティが能動化されたり、活性化されたり効果。
中期的効果 長い間、高校の進学実績競争は、主として大学進学者数（とりわけ難関大学進学者数）を争ってきた。地域に“優秀な”高校があることが町民の子どもの学歴獲得競争を有利にする効果。
長期的効果 将来地元地域で活躍する人材育成を通して地域の活性化に貢献する効果。

学歴社会では生徒の社会＝経済的地位達成は学歴に強く規定される。それゆえ、これまで高校は３つの効果のうち中期的な効果を高めることに力を注いできたきらいがあった。しかし、今日では学歴社会的な地位達成が揺らいでいる。都市で学んだのちに地方で暮らす若者（U ターン、I ターン）がふえつつあることが分かった。また、島留学で有名な隠岐島前高校は、生徒がいったんは都会に出て将来ブーメランのように戻ってくることを期待し、そのことにつながる教育を意識していた。離島・中山間地域（以降、「中山間地域」と呼ぶ）の高校生のUターンに限って見てみると質問紙調査の結果では生徒の地元居住希望率が 25 才時には 29.2%、40 才時には 47.4%であった。かつての生徒の意

識とは大いに異なる数字となっている。中山間地域の高校は、かつては若者が都市へ流出することを前提とした進路指導を行った。同窓会誌などの資料をも見ると、実際に都市部大学への進学や高卒で都市部に就職することが大きな流れとなっていた。そして、インタビュー結果は、それらの都市部への流出は片道切符を手にした流出であったことを明らかにした（しかし、流出時の意識とは異なり、インタビュー対象者は都市での生活を過ごしたのちに復路の切符を購入していた・・・)。

今日では高卒時点で地元就職者と将来のＵターン希望者が増加しており、生徒が高卒就職したりＵターンして地元で生活することを容易にする長期的な視点からの人材育成が求められていた。

このあと、質問紙調査の結果に焦点を当て、本研究の成果を紹介する。本研究では、次の仮説と探索的課題を設定した。

【仮説１】協働的で非流動的な農村共同体の特徴を残している(農水省 2007)ので、中山間地域の高校生は、ソーシャル・キャピタルが豊かである。

【仮説２】同じ事情から、中山間地域の高校生は、結束型のソーシャル・キャピタルが強く橋渡し型のソーシャル・キャピタルはそれよりも弱い。

【仮説３】同じく、中山間地域の高校生はＵ&Ｉターン者や地域活動者とのネットワークが豊かである。

【仮説４】同じく、中山間地域の高校生は、互酬性の規範形成は特定化された互酬性が強く一般化された互酬性はそれよりも弱い。

【探索的課題１】高校生のソーシャル・キャピタルの３要素（信頼形成・互酬性の規範・ネットワーク）は相関があるか。

【探索的課題２】中山間地域の高校生のソーシャル・キャピタルの形成と地域課題解決型学習の効果はどのように相互作用するか。

中山間地域の高校生のソーシャル・キャピタルについての質問紙調査から、次の仮説が支持された。【仮説１】「ソーシャル・キャピタルが豊かである」は、ソーシャル・キャピタルの 3 要素の内、信頼と互酬性の規範については支持された。しかし、ネットワークについてはタイプによって支持のされかたに強弱があった。【仮説２】「結束型のソーシャル・キャピタルが強く橋渡し型のソーシャル・キャピタルはそれよりも弱い」は信頼、互酬性の規範、ネットワークのそれぞれについて支持された。【仮説３】「Ｕ&Ｉターン者や地域活動者とのネットワークが豊かである」は支持されない。【仮説４】「互酬性の規範形成は特定化された互酬性が強く一般化された互酬性はそれよりも弱い」は支持された。

探索的課題では、【探索的課題１】「高校生の信頼形成と互酬性の規範の形成とネットワーク形成は相関があるか」については、ソーシャル・キャピタルの要素間の相関は意外にも低いことが分かった。【探索的課題２】「中山間地域の高校生のソーシャル・キャピタルの形成と地域課題解決型学習の効果はどのように相互作用するか」は、知識を得ることだけではソーシャル・キャピタルの形成には結びつきにくいことが明らかとなった。しかし、当事者性を高めること、すなわち地域課題解決型学習で期待や可能性を感じ、貢献意欲や誇りを喚起することはソーシャル・キャピタルの各要素の形成と相関があった。

本研究は地域の自律と活性化に果たす高校の役割の増大を前にして、生徒のソーシャ

ル・キャピタルの現状と、それを豊にする方法について考察した。

生徒のコミュニティ内でのネットワーク形成は向上の余地が多く残されており、そのような中で高校が授業内外で生徒と町民の交流の場を作るなどして、生徒のネットワーク形成を促進していることの意義は大きい。また、生徒の結束型のソーシャル・キャピタルは豊かで、橋渡し型のソーシャル・キャピタルは豊かでないことが明らかになった。この点についても、高校が生徒に町外との交流、町外の知恵や技術、視点の学習機会を構築していることは重要である。このときに、3 要素間の相関が低いので、1 つの要素を行うことで他の要素への波及効果が期待されにくい。個々の要素への働きかけを意識しておくことが求められる。最後に本研究の探索的課題２の結果より、当事者性（「自分ごと」「自分たちごと」＝期待や可能性の認識、貢献意欲や誇りの喚起）とソーシャル・キャピタルには相互作用があり、今後、当事者性を高める学習機会が増加することが求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者、研究協力者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

・樋田大二郎, 2016, 「地域課題解決型学習の意義と実際―島根県離島・中山間地域の事例をもとに新しい教育方法を考える」『青山学院大学 教職研究』第 2 号, 177-191 頁. 査読無し

・樋田有一郎, 2015, 「高校生の当事者性を育てる　地域型授業のモデル化をめぐって」,『青少年問題』第 660 号, 42-47 頁. 査読有り

・樋田大二郎, 2015, 「離島・中山間地域の高校の地域人材育成と「地域内よそ者」－島根県の「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」の事例から－」、『教育研究（青山学院大学教育学会紀要）』、第 59 号, 149-162 頁. 査読無し, https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/17397/17397.pdf

・樋田大二郎・樋田有一郎, 2015, 「社会関係資本と地域資源の利活用による地域人材育成一島根県離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業の取り組み－」、『青山学院大学教育人間科学部紀要』第 6 号, 1-20 頁. 査読無し

・樋田大二郎, 2015, 「人口減少問題と高校教育ー高校魅力化による統廃合回避と地域の活性化」,『月刊高校教育』, 42-45 頁. 査読無し

・樋田有一郎, 2014, 「町存続の生命線としての高校存続。町活性化の最前線としの高校活性化」, 『青少年問題』,第 660 号, 42-47 頁. 査読有り

・樋田大二郎, 2014, 「農山村スモールビジネスと地域人材育成－高校教育の新しい課題一」, 『教育研究（青山学院大学教育学会紀要）』, 第 58 号, 111-123 頁. 査読無し https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/16808/16808.pdf

・樋田大二郎・樋田有一郎, 2014, 「地域人材育成の教育社会学一過疎地の活性化に果たす高校教育の役割一」『青山学院大学教育人間科学部紀要』第 5 号, 1-18 頁. 査読無し

〔学会発表〕（計６件）

HIDA Yuichiro, 2016, Education in remote areas in Japan: Japan as an aging and population reduction society, Comparative Education Society of Hong Kong 2016, China The Hong Kong Institute of Education.

・樋田有一郎, 2015, 「地域人材育成の教育社会学（５）－地域系高校の課題－」日本教育社会学会第 67 回大会，駒澤大学.

・樋田大二郎, 2015, 「地域人材育成の教育社会学（４）－地域系高校の背景と意義－」，日本教育社会学会，第 67 回大会，於．駒沢大学.

・樋田大二郎, 2014, 「地域人材育成の教育社会学（３）－従来型学校知から地域型学校知への移行過程について」，日本教育社会学会，第 66 回大会，於．松山大学.
http://ci.nii.ac.jp/els/110009892852.pdf?id=ART0010420111&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1460389643&cp=

・樋田有一郎, 2014, 「地域人材育成の教育社会学(2) :地域型学校知の学習過程の組織化」日本教育社会学会第 66 回大会，松山大学.
http://ci.nii.ac.jp/els/110009892811.pdf?id=ART0010420069&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1460390021&cp=

・樋田有一郎, 2014, 「地域活性化と高校教育」日本子ども社会学会第 21 回大会，敬愛大学年 6 月.

・樋田大二郎, 2013, 「地域人材育成の教育社会学(1)－過疎地の活性化に果たす高校教育の役割」,日本教育社会学会第 65 回大会，埼玉大学.
http://ci.nii.ac.jp/els/110009732644.pdf?id=ART0010223407&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1460389843&cp=

６．研究組織

(1)研究代表者
樋田　大二郎（HIDA, Daijiro）
青山学院大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：80181098

(2)研究分担者
岩木　秀夫（IWAKI, Hideo）
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号： 90114389

沖塩　有希子（OKISIO, Yukiko）
千葉商科大学・商経学部・准教授
研究者番号：50617917

西田　亜希子（NISHIDA, Akiko）
大阪市立大学・人権問題研究センター・特別研究員
研究者番号：70554319

(3)連携研究者
無し

(4)研究協力者
樋田　有一郎（HIDA, Yuichiro）